

誤訳例分析にみる中国人における中文日訳の問題点

櫻田 芳樹*

An Analysis of Errors in Translations

from Chinese into Japanese by Chinese Students

Yoshiki Sakurada

Received October 26, 1988

はじめに

筆者はかつて上海外国語学院で日本語の教育に従事したことがある。以下は当時学生の中文日訳添作の分析を試みたものである。中文日訳を総括的見地から論じたものではないが、彼の地の俗諺に「小さい雀にも五臓六腑はそなわっている。」というように、一添作例の分析に「孤立語」から「膠着語」への訳の困難さの基本的、普遍的問題が現れていると思うので、旧稿の塵を払って記録にとどめたいと思う。(注1)

上海外語学院日語教研室編「日語(にほんご)」第五冊上は、第一課「めくらになった名僧」からはじまる。「めくらになった名僧」とは鑑真和上のことである。その課の終了時に、発展教材として「人民日報」の鑑真紹介記事の一部を与え、中文日訳の練習を試みた。

全体的にいて、学生の訳文は何とか日本語になっているが、かなりよく訳せたものでも、これをそのまま鑑真紹介のパンフレットとして公開できる水準にはまだまだ大きなへだたりがあった。(帰国後日本の大学の中国語教育に関わる日々を送り、いまは、むしろ彼らはよくやっていたと思っている。)学生は三年になったばかりで、特に翻訳について専門的訓練を受けているわけではないので、そこまでのことを望んではいなかったが、練習、添削を通じて、徐々にそこまでもっていかうというのが抱負であった。

以下中国人の中文日訳一般の問題点との関りに意を払いつつ、分析の結果を示したい。

課題文

*外国語学部

Faculty of Foreign Languages

鑑真在日本生活了十年，对日本文化的发展，中日文化交流作出的贡献是巨大的。当然这种功绩不是他个人的，但没有他的领导和坚持，是不可能有这样成功的。

鑑真东渡和生活的时代，正是唐朝文化繁荣的时期，而他有意地率领一批有实际知识的人，带去不少书本，工具和技术。他把盛唐文化传到日本，经过日本的消化吸收和发展，成了天平文化的组成部分。当时的天平文化是可与盛唐文化相媲美而夸耀于世界的。

当然，鑑真的贡献主要在日本佛教方面。现在日本佛教史上，以鑑真为律宗的开山祖，授戒制度也由他开始。他对日本佛教的发展起了很大作用。

以中日文化角度来看，鑑真一行的功绩，不止是把盛唐文化带到日本，而且是同日本固有文化相结合，促进了日本文化的发展。

学生A訳例

①鑑真は日本で十年ぐらくらしました。日本文化の発展と中国文化交流に大きく貢献しました。②もちろんこの功績はかれ自分のではないが、かれの指導と堅持がなければ、このような成功がありえません。③鑑真が東渡と生活の時代は唐の文化が栄えていた時期です。かれは意識的に実際知識を持った人を率い、たくさんの書籍や道具や技術を持っていきました。④かれは盛唐の文化を日本へ伝え、日本の消化、吸収、発展を通じて、天平文化の一部になりました。⑤当時の天平文化は唐の文化と肩を並べて世界に…(空欄)…⑥勿論、鑑真の貢献は主に佛教の方面です。⑦現在日本佛教史において鑑真を律宗の「開山祖」としています。戒を授けるという制度も始まったのです。⑧かれは日本佛教の発展に大きなやくわりをはたしました。

⑨中国文化交流史からみれば、鑑真一行の功績は盛唐の文化を日本へ持って行ったことだけでなく、日本の固有文化と結びついて、日本文化の発展を進めました。

この訳文は③の圈点を施した部分の強引な漢語の持ち込みを除き、クラス全体の中ではよく訳せている方の文である。⑤…の部分については訳に迷い空白のままであるが、後にみるように大多数の学生が、原文を何とかねじふせようとして読めない日本語を記しているのにくらべ、むしろ自分の訳案が日本語にならないことに気づいているための空白と評価される。

1 文体について

まず、文体についていえば、論文調のものを訳すには常体を用いるのが一般だが、二十六人中十七人がこの例のように敬体を使っている。このことは、本教材の本文が小学生向けの文章であり、敬体を使っていること、成人を対象とした日本語教科書の多くに日本の小中学生向けの文章が採られていることと無関係ではないと思う。これは日本語教科書編纂上留意されるべき点である。

本教材を教えるに当たり、それが子供向けの文章である故に敬体が使われていること、表題なども普通の文体なら「盲目の名僧」とでもつけられること、を抑えておいた。また、文中にみられる、

「東大寺という大きな寺の大仏」

「『大仏開眼』とって、大仏が完成したことを祝う儀式」

などの子供を意識した言い換えを授業中その都度指摘して学生諸君を相手の文でないことを確

認しておいた。その上で十七例の敬体での翻訳である。教材の選び方の影響を知るに足ると思う。

ことがらは文末の処理のみに関わるものではない。例えば他に常体を使った訳文でも⑦の部分

「現在日本の仏教史上、鑑真を律宗の開山とされている。戒を授ける制度も彼によって始まったものである。」

のように訳している。この文の訳にそのまま「授戒制度」という漢語を使ったものは二十六人中一人もいない。いずれも圈点と同様か「戒を授けるという制度」という語をあてている。勿論「授戒」という中国語が、日本語にとけこめる漢語かどうか疑問をもった結果こう訳したということも考えられるが、ややもすれば中国語の熟語をそのまま日本語に持ち込もうとする学生が多い中で、一人もそうしないのは、本教材の影響が強くてしているものと思う。(本文に「そのころの日本には、戒を授けることのできる僧がいませんでした。」とある。)成人向けの教材に日本の小学校教材を利用することの可否については、日本語教育学界全体で考えるべきものがあると思う。

2 各文について留意すべき点

次に各文についての添削を試みよう。

◇切れそなたつながり——「孤立語」のつながり

まず①の訳文は、直訳としてはそう問題はない。問題は原文が一文であることを二文に分けたところにある。というのは、原文の「生活了十年」は直訳では「十年くらした」とか「十年生活した」としか訳しようがないからである。そこで中国語としても切れそなたつながり部分に「(那时他)对日本文化的发展, 中日文化交流作出的贡献」の気分があることを読みとれば、「鑑真は日本で十年くらした、その間彼は……」となる。「鑑真は日本で十年間くらした。」で切ったのではプツンと切れたようになるので、「その間」の「間」にかけて、次のようにしたらいいのではないか。

①改訳：鑑真は日本で生活した十年の間、日本文化の発展、中国文化交流に大きく貢献した。いわば、「孤立語」の切れそなたつながりには、「膠着語」ではしっかりした接着剤を使わないとプツンと切れてしまう例といえよう。

◇「贡献gong xian」と「貢獻^{きん}」のズレ——日中同形語のズレ その1

これで①の文はひとまずよいと思うが、実は他の多くの学生がつまづいている部分として「作出的贡献是巨大的」がある。つまり日中同形語のズレの問題である。

- アー1 「つくった貢献は巨大だった。」(1例)
- 2 「につくした貢献は大変大きい」(1例)
- 3 「あたえた貢献は大きいなのである」(1例)
- 4 「に果した貢献は非常に大きい(である・です)」(2例)
- イー1 「にささげた貢献が巨大です。」(1例)
- 2 「に対しても貢献がたいへん大かったです。」(1例)

— 3 「に尽した貢献が巨大です。」(1例)

これらの訳例は中国語の「A是B」の文は日本語の「AはBである」または、「AがBである」に置き換えるという既成観念によっている。中でも強引なのが、ア—1の訳例で「作出 zuochu」「巨大的judade」などの中国語のそれぞれの単語までそのまま日本語に読み変えようとしたものである。「巨大的judade」をそのまま訳に持ち込んだ例としては他にイ—1, —3, なども見られる。そうした訳語に吟味が加えてあるア—2, 3, 4, (3, 4は余計な語尾をとらねばならないが,) などは一見見えそうな訳にみえるが、この文は「は」を使おうと「が」を使おうと、「AはB」「AがB」型の文では訳せないのである。それは日中同形語「貢献」の双方での使い方の差によるものである。

国語辞典を引けば、どの辞典にも「貢献」の語には「名詞, サ変動詞」と記してある。しかし、名詞が使える場所ならどこでもこの「貢献」という名詞を使えるとはいかない所に面倒な点がある。「名詞, サ変動詞」とは書かれていても、それぞれの辞典では次のようなものが例文としてあげられている。

- a 「世界平和に——する」
- b 「前略—翻訳家の場合彼らに——しうるのは、主としてその直訳調にあるといっても過言ではないのである。」〈河盛, 翻訳論〉
- c 「県下教育の上に——すること尠からずと書いてあった。」〈破戒・島崎藤村〉
- d 「世界の平和と人類の福祉に——しようとする決意を示した。」小学館 日本国語大辞典
- e 「学問に——した人々」 岩波国語辞典第三版
- f 「社会の進歩に——する」 広辞苑第二版

b, c, dが採集例であるほか, a, e, fは作例であるが, いずれにも「貢献」の名詞の用法はあげられていない。勿論用例辞典として現在の国語辞典を使うわけにはいかないが, それでもこの例文のあり方は, 「貢献」の語の実際の使用の仕方を反映していると思われる。cの例は名詞には違いないが, ここでは, それが「に——スルコト」とサ変名詞になっている点に注意していただきたい。そしてa~fまでの例文から共通に帰納できるのは「~に貢献する」という言い方であり, 「貢献」の語の実際の使用例とも符節が揃っているものである。つまり「貢献」を名詞として使うことは非常に稀であり, 「は」で主題化しているのはまだ日本語になじんでいないということである。

ただ, 日本の中日辞典や日中辞典を引くと事情は変わってくる。

Gong xian [動] ささげる, 寄与する, プラスになる。(一切都~給祖国)(音略) = 一切は祖国にささげる。[名](他的~很大) = 彼の貢献はとても大きい。岩波中国語辞典

こうけん [貢献] ア人類の生活に大いに——した/对于人类生活方面贡献不少。

イ平和のために——する/为和平而贡献。

ウ学問の発展に——がある/对学問的发展上有所贡献。

エ大きな——をした/作出了重大的贡献。

オ大きな——をした/作出了伟大的贡献。

カ弁証法に対して大きな——をした/对于辩证法给了很重要的贡献。光生館現代日中辞典
岩波の名詞としての「他的~很大」の訳, 光生館のウ~カの例文には名詞の形の訳例と例文

が出てくるが、これらは中国語の用例から出て来た日本語だと思われる。(注2) 日本の大学の中国語学習の教場における訳文では、普通「彼の貢献はとても大きい」という句のもつ程度の不自然さは、意がとれていればよいということで問題とはされないであろう。しかし、これを公表を予定する文のようなレベルでは使うわけにはいかないことは日本では説明を要しないであろう。つまり一般的日本語としては定着したいい方でないもの、少々中国語よりの日本語が出てくるのである。日本人の使用を目的とした辞書であるので、これは問題とはならないが、中国人が使う場合はこの点に留意しなければならない。

そこで光生館のAの例文をもう一度みていただきたい。

人類の生活に大いに——した／对于人类生活贡献不少。

日中両国語の「同一のコトガラ」に対する貢献^譯とGong xianのあらわれ方は、このAの例文が典型だと思う。日本語では「貢献が少なくなかった。」とも「貢献が大きかった。」ともいわず、「～に貢献した。」となり、中国語では主語としての名詞が出てくるのである。こうした細部の生きて動いている差が日本語教育の現場の問題であるから、辞書をつきあわせて語彙カードをとり、日中同形語の重なりと差異を論じてもほとんど意味がないのである。

また、貢献の言葉に戻っていえば、明治のコトバの用例である〈破戒〉では「県下教育の上に貢献すること尠からず。」と漢文訓読調のいいまわしでサ変名詞の形もでてくる。ここらが日本語の複雑なところで、その訓読調を意識して使う場合、例えば「对于人类生活贡献不少」が具体的個人の業績をたたえる時、改まっておごそかに発言されるような場合には、漢語的文脈をもちこんで、「人類の生活に貢献すること少なからぬものがあり」とか「人類の生活に貢献することまことに大であり」などの言い方もできうる。そしてこういういい方が頭にあれば、その変形として「某々翁の電力界に果たした貢献は偉大なものがあります」など、主題化された「貢献は」もでてきうる。重ねていうが、ここらが「中国語と対応する漢語」(文化庁、日本語教育研究資料の書名)の厄介なところである。日本語教育学界の機能主義のあまり、二冊目の対照語彙集が「漢字音読語の日中対応」として出版されるようだが、一応便利は便利としても、この生きて微妙なところに触れるのでなければ何度やってもその努力は報われないように思う。

そこで日本語の「貢献」の用法が、「～に貢献する」が基本であることが了解されれば、改訳例のようにするか、あるいは

「～におおいに寄与した。」(3例)のように訳すということになる。他に「～に大きな貢献を捧げた。」(1例)のような訳もみえているが、これも中国語的発想の方が強く直訳調である。

◇②「彼のです」と「彼のものです」—日中対応語のズレ—「的de」と「の」の問題

A訳例では

「この功績はかれ[◎]自分[◎]のではないが、かれの指導と堅持[◎]がなければ、このような成功[◎]がありません。」

とある。圏点を施した部分に問題があり、

その問題点はほとんどの学生にも共通してみられる。

まず、「不是他个人的」の訳に「～のもの」を使ったのはただ一例、それも

「自分のものではないが」

とあって、訳としては使えない。「自分のものではない。」はやがて「他人のものである」を意味しかねない。

鑑真個人のではないが (1例)

彼一人のではないが (7例)

彼だけのではありませんが (2例)

などは「のモノ」と「モノ」をそえれば、一応の訳となりうる。それでは何故ここで、「モノ」を使えた学生が一人しかいなかったのだろうか。それは察するに「这架录音机是你的吗?」「是我的。」のような文では、「この録音機はあなたのですか。」「はい、私のです。」のようにいえることの影響であろう。「的」と「の」の対応の中で口語において多用され、目立つものが、他の文章語的用例にまでハミだして影響を与えているものと思う。

具体物を指す場合には、「この録音機はあなたの録音機(モノ)ですか。」とか「はい私の録音機(モノ)です。」というのはうるさい感じを与え、上のような省略したい方が普通である。それは中国語でも同じである。一方「这种功绩不是他个人的」と抽象名詞でも、中国語は「的」でとめて、その後「功績」またはそれに替わる形式名詞を要しないが、日本語では抽象名詞の場合にはせめて形式名詞「モノ」入れないと落ち着きが悪い。(注3)

◇堅持jianchi≠堅持^ジ——日中同形語のズレその2

この部分では、「強い決心」という訳が一例みられる他、「我慢」「続き」などの訳を当てたものが、僅かに日本語への移行に苦しんでいるのみで、殆どの学生が、「堅持がなければ」と「堅持」をそのまま使っている。「現代汉语词典」などをみても「堅持Jian chi」には名詞の例文をあげてないし、「岩波中国語辞典」の例文にも名詞としての用例は採集されておらず、その品詞を動詞としている。私のカンでは中国語でもこの文のような名詞としての使い方は比較的新しいものと思う。また日本語では、名詞として使うのは殆ど無理であると思う。(岩波国語辞典第三版などは《名、ス他》としているが、漢語よりの品詞認定で、主題化した「堅持は～」のような用例は捜し出せないと思う。)

そこで「堅持Jian chi」の内容を考えると「幾多の困難にあいながら初志を堅持したこと」であろうから、「持続的努力」、「不屈の努力」などという語で置き換える。

またこの「没有」を「～なしには」と処理できた例も僅か(3例)であり、可能な訳として、「～を抜きにしては」(2例)を加えても、他はみな「～がなければ」「～がなかったら」としてある。ここではこの5例のようなひきしまった言い回しを使いたい。

最後に②の文の訳についてふれておきたいことは、その文末の処理である。訳例では、「このような成功[◎]がありません。」とあり、他の学生の訳もほぼこうした断定的口調である。歴史的事柄に仮定を設定したい方であるから、「ありえなかったろう」のように文末に推定の響きをもたせ断定を避けるのが日本語らしい表現である。

②改訳 勿論このような功績は彼一個人のものではないが、彼の指導と不屈の努力なしには、このような成功はあり得なかったであろう。

◇「东渡dong du」をどの程度日本語に持ち込めるか——日中同形語のズレその3

まず、「東渡」、「生活」の二語は主語「鑑真」を受けた並列の述部（動詞）であり、ともに「時代」の修飾語になっていることをはっきり意識していないと、訳例のように、「鑑真が東渡と生活の時代」と体をなさない漢語の持ち込みをやってしまう。かなり陥りやすいワナで、訳例と同じものが7例、他に「東渡」「生活」をともに名詞として訳したもの4例、計11例にのぼる。「東渡と生活した時代」5例、「東渡と生活する時代」3例、「東渡と生活していた時代」1例のように「生活」のみを動詞として訳したもの他、まがりなりにもここを切り抜けられた訳例は次の一例のみである。

「鑑真が東渡した時代、いわば鑑真の生活していた時代」

そこで「東渡」という漢語をどの程度日本語に持ち込みうるかだが、「鑑真の東渡は日本文化に大きな影響を与えた」のように固い文章の中に名詞の形で用いるのは可能である。しかし、「東渡した時代」の時代のようにサ変動詞として使うのは直訳として使っても、些かこなれない表現で、「日本へ渡り生活した時代」のように意識すべきである。

◇「有意识地」と日本語の「意識的に」のズレ

③文の問題の第二点は、「有意识地率領」をそのまま訳例のように「意識的に～を率い」と訳したのでは座りが悪いということである。他の文ではたしかに、

「人の目を引こうと意識的に奇矯な振る舞いをする。」

のように「意識して」の意で、「意識的に」を使える。しかし、次の例文を見ていただきたい。

「先生が気付くかどうか、意識的に間違いを入れておいた。」

「意識的にやったのかどうかはともかく、他人に迷惑をかけたのは事実なんだから、言い訳などしないであやまりなさい。」

以上はいずれも「意識して」で置き換えられる。日本語で「意識して」と言い、「意識的に」という場合、「故意に」「わざと」、「知っていて」などの含意を持ち、プラスのことよりはマイナスのこと、意地悪、からかいなどをやる場合に使われることが多いと思う。それで、この場合有意義なことを行っているのであるから、座りが悪いということになるのであろう。

日本語では事が「意識して、意識的に」行われたのか、「意識せずに、無意識に」行われたのかが問われるのは多くそういうマイナスの事態に対して動作主がどんな意図を持っていたか問題となる場合だと言えよう。鑑真は何も悪いことをしたのではないので、ここでの「有意识地」は「その必要を見抜いて実際的知識をもつ人々を率い」のように意味をとって訳すか、その意味をあらわには出さず、「特に実際的知識をもつ人々を率い」と「特に」の一言を使って、それが普通の見識ではないことを強調するような訳し方にしたらいいと思う。

他に③の文では、「一批」は相当数の意であるから「大勢の」の語をあてておく。また「带去」は「持って行く」でよいが、その対象に「技術」というような抽象物を含んで全体として「文化」を持っていったのであるから、美化語「たずさえて行く」を使うといいだろう。

③改訳例 鑑真が日本へ渡り、生活した時代は唐の文化の最盛期であり、その上かれは特に大勢の、実際的知識をもった人々を率いて、たくさんの書籍、道具、技術をたずさえていった。

◇主述文を連体修飾句に訳す例

訳例の④は直訳としてはあまり問題がないが、「他把盛唐文化传到日本」の訳には一工夫欲しい所である。

原文の論理の筋目を表立たせれば、「他把盛唐文化传到日本，（那盛唐文化）经过日本的消化……天平文化的组成部分。」となり、「经过」、「成了」の主語は、「盛唐文化」ということになる。①の文でも切れそうなたつながらということを言ったが、よくある中国語の行文の一つで、「他把盛唐文化传到日本」といっておけば、読者にはその「盛唐文化」を主題化する準備はできており、実際には括弧内に補ったようなウルサイことはいわないであろう。

日本語で「彼は盛唐の文化を伝え」のようにいって、「その盛唐文化は」をいわずに中国語の残像効果のようなものが働くかどうかが問題であり、それが中国語程度に働くなら訳例のような直訳でいいわけである。確かに、この場合同じような意識が働くから、訳例のような文でも理解可能（いいたいことは解る）なわけであるが、間違いのレベルとは違った段階で、不十分な訳と受けとられるのは、中国語ほどその残像効果が強くないのだろうと思う。（注4）

そこで、この残像効果の隙間を埋めるため、どういう工夫ができるのか、他の学生の訳例をみてみよう。25名中9名が何らかの形でこの隙間を埋める工夫をしている。一つは、「彼は盛唐の文化を伝えた。それから……」と接続詞「それから」を入れて隙間をつなごうとしている。他に「伝えた。」で一旦切ってしまうと、「盛唐文化は」、「この文化は」と残像を主題として明示したもの2例がある。たしかに、残像を明示すればその隙間は埋められるが、今度は日本語でも論理の筋目が目立って、ややウルサイ文になってしまう。そこで多少手直しすれば使えるようなのが次の4例である。

- a 「彼に（よって）日本に伝えてきたさかんな唐の文化は……」
- b 「彼が日本に伝えてきたさかんな唐の文化は……」
- c 「たけなわの唐文化は日本に伝えられ……」
- d 「彼の盛唐文化が日本に伝わると……」

a, bは主述文の目的語を主題とし、他の部分にかけて行く方法、c, dは目的語を主題（主語）とし、他をそれについての述部とする方法で、いずれも他の部分に手直しを加えなければならないが、可能な処理方法である。文を引きしめる意味では、ここでは主述文全体を主題化してしまうa, bの方が上策である。

他にこの文では、訳語としてとまどうのが「組成部分」である。「組成^{せいせい}」というのは化学用語等で物質のなりたちなどをいうには使えるが、「文化」のような抽象物には、そのままは使えない。そこで訳例のように「一部分」と訳すことも可能であるが、そうすると、天平文化全体の中にはめこまれた部品のような感じになってしまう。「消化、吸収、発展を通じて」いるのだからもっと渾然一体化しているわけで、はめ込み部品のような感じを与えてはまずい。

そこで「構成部分」として、その点をうすめようと思うが、それでもなお「一部分」的な感じが残るかも知れない。そこで「構成要素」としてみた。実際に学生の訳を直した時に、「天平文化の骨格となった」のように添削したのだが、これではどうも一体化の面より主従関係がでてしまうようだ。また、「经过日本的消化、吸收和发展」であるが、文化の受容を「消化吸收」と比喩するのは可能であるが、「発展」という段階の違うものを並列させることには一寸無理があり、論理的には「消化、吸収」を通じて発展せしめられるということなので、次のように

訳してみた。

④改訳例 彼の伝えた盛唐の文化は、日本の消化、吸収を通じて発展し、天平文化の構成要素となった。

◇⑤「A是可与比相媲美而夸耀于世界的」——文語調の中国語の訳について

ここでは「媲美」、「夸耀」など中国語でもかなり荘重な文章語であり、にわかには日本語には置き換えにくい語がでていたため、学生の訳は大変もたついている。訳例にとりあげた学生は、この部分を白紙のままに残しているが、自分の腹案が日本語らしくないこと、あるいは自分の語彙に適切な語がないことに気づいているものと思う。他の大多数は七転八倒珍妙な日本語をこねあげている。

まず、一寸した手直して何とか使えそうな訳例から見ていこう。

当時の天平文化は盛唐の文化

イ、と並んで世界によく知られています。

ロ、と並んで世界で有名です。

ハ、と並んで世界に注目されていた（とも見えよう。）

ニ、と並んで世界でも人々の目を引いています。

ホ、と並んで世界に注目されていました。

ヘ、と同じくらいに世界でも知られていました。

イ、の訳は「可」意味を訳出することに拘わらず、「媲美」、「夸耀」ともにその意味をとってやさしい日本語に置き換え、あっさりした訳文にして一応切り抜けに成功している。しかし、普通この程度のあっさりした訳では、中国語を考えると我慢できないというのが、学生諸氏の考えであろう。ロ、の訳も同じであるが、「文化」を俳優の人気なみの「有名」という語で受けたところに難点がある。

ハ、ホ、ヘ、は「当時」とあるために、「注目されていた」、「…ていました」のようにしているが、これは現時点での歴史評価であって、天平文化がその当時世界に知られていたわけではないので、「ている」で受けるべきである。

ト、と並んで世界で大変な人気を呼んでいました。

チ、と同じく全世界に知られて鼻にかけるものだ。

ト、チ、のような例は、「夸耀」の重さを訳したくて訳語の選定を誤ったという点ではロ、と同じレベルの欠点なのだが、「有名」の不自然度より、この二例の不自然度は甚だしい。慣用句集や諺を好む中国人的の修辭の好みは必ずしも語学学習にストレートに役立たぬことの例である。ト、は興業の評判でも聞いているようだし、チは「夸」の感じを出そうとして折角覚えた慣用句を使ってみたのだが、文脈なしに対訳で覚えたばかりにその不適に気づけなかったのである。「鼻にかける」は「慢心」と置き換えられるマイナスの用語である。

⑤改訳例 当時の天平文化は盛唐の文化と肩を並べ、ともに世界にその美を誇っている。

◇⑥「A在B方面」と「AはBにある」、「AはBである。」

この文の訳はあまり問題がないが、訳例の落ち着いたかなさは、「A在B方面」を「AはBです」の型を使って訳したことにある。勿論「A在B方面」を「AはBです」の型を使って訳せない

ことはない。そのためにはBをA相当の名詞句としてもっと安定した形、「…は日本仏教に関するものです。」のようにしなければならない。

⑥改訳例1 勿論、鑑真の主要な功績は日本仏教の面にある。

改訳例2 勿論、鑑真の主要な功績は日本仏教に関するものである。

◇⑦中国語では跳びこえられる溝が、日本語では跳びこえられない例

①の文で「切れそうなつながり」といい、④の文で「隙間があるが残像効果が働く」といったことを思い出していただきたい。この文でも「以鑑真为律宗的开山祖」と「授戒制度也由他开始。」の二句には切れそうなつながり、隙間、溝があるが、中国語では前の句の「以鑑真为……」の残像効果が後の句まで残り、その溝は十分跳びこえられるのである。

訳例では二つの文にわけて訳出しているが、それぞれの文では問題ないが、その間にははっきりした溝ができてしまっただけで跳びこえられない。つまり前の文は、日本仏教学史の評価、後の文は筆者自身の見解ということになってしまう。

それでは論理の筋が通らないので何となく変だということになる。仮に二文とせず、「開祖とし、」として一文につなげても、その溝は跳びこえられない。従って後の文の内容も日本仏教史における見解であることを示すように訳さなければならない。この点に気づいた訳は皆無である。①、④の文では一部の学生がその隙間、溝を埋める方途を探していたが、殆どが失敗に終わっていること、⑦文では、殆どその溝の存在に気づかずにいること、などを考え合せてみると、それぞれ膠着語、孤立語という性格を持った日中両語の修辭的残像効果の有効度という典型的問題であると言えよう。

他に「開山祖」は日本に入っている形では「開山」、「開祖」という。読み下しだが「開山の祖」も許容の範囲であろう。「授戒制度」については、文体の部分で述べた通りである。ちなみに佃実夫「中国旅行アルバム」(日外アソシエーツ刊)の「揚州、大明寺」の紀行では、同様のことを話題にして「授戒制度」としている。

また、もう一言断っておかねばならないのは「日本仏教史上」はそのまま「日本仏教史上」としているものが殆どあるが、それでは「日本仏教の歴史において」ということになり、「日本仏教史では(においては)」と訳してはじめて、学史としての「日本仏教史」の意を持たせうることである。私の中国語理解に問題がなければここは、学史としての「日本仏教史」という意に解すべきである。

⑦改訳例 現在、日本仏教史では、鑑真は律宗の開祖とされ、授戒制度もかれによって始まったとされている。(ここでは「鑑真を～とし・～としている」と目的語とせず、「は」で取り上げて受け身とした。)

◇⑧文と文の間にある溝

この文の訳は訳例のままでも使えるし、他の学生の訳にもあまり問題はでていない。「起了很大的作用」を「作用を起こした」(2例)など、「作用」の語をそのまま日本語に持ち込んだものがみえているが、もともと「作用」は日中両語とも物理学用語、化学用語としての使い方が多い。中国語では文化の生成なども化学的触媒作用に比喩されるが、日本語では元のイメージが強すぎて、比喩としては使いにくいと思う。

さて、一文の訳としてあまり問題がないのだが、訳文の方の前の文を読み、この文を読むと何かつながりの悪さを感じる。先にふれた行文の際の残像効果が違うため、中国語ではこえられる溝が、日本語では跳びこえられないで残ってしまう例が、文相互の間にも存在するということである。

中国語では⑦の文を読み、⑧の文を読んで行くと、⑦の残像効果が残って、⑦をより所として⑧を述べていることをあらわに言う必要はない。⑦⑧の間に「从这些评价来看」を補えば、却ってウルサイということになろう。しかし、日本語にしてみると、この部分を何らかの形で補わなければ、その隙間が大きすぎて何ともつながりの悪い文になってしまう。そこで「从这些评价来看」のようなものを読みとって、それを補って訳さねばならない。そこでそれをどう補うかだが、1例だけ学生の訳の中でその隙間を埋めているかに見えるのが、次の訳例である。

彼は日本仏教の発展に大きな役割を果たしたのである。

冒頭の訳例とこれを較べてみると、敬体・常体の違いの他に、「果たしたのである」とあって、こちらには「のである。」がプラスされている。文末にこの言い方がくると、「彼は日本仏教の発展に大きな役割を果たした」というのが、単なる事実の客観的叙述でなく、筆者の判断であることが強調される。勿論、中国語の残像効果に変えて、次のように、

「こういうことから見ても、彼は日本仏教の発展に大きな役割を果たしたのである。」のようにすれば、隙間は完全に埋まるが、これではあまりに説明的にすぎるので、「のである」、「といえよう」(1例)のような判断の辞を加えるに止める。そうすれば、何とか前文をその前提として受けとめる力が後文に生じる。

⑧改訳例 彼は日本仏教の発展に寄与したのである。

◇「趨行補語」等をそのまま日本語に持ち込めない例

⑨の文の訳例の問題点は「带到」を「持って行った」と訳しているが、その目的語は「文化」であるから「伝えた」としたい。しかし、より面倒な問題は別のところにある。③の文で「带去不少书……」を「たくさんの書籍……をたずさえて行った。」と訳しておいたが、A訳例ではここもやはり「持って行く」を使っている。改訳では「持って」を「たずさえて」と美化語に変えただけだが、ここでの主な動詞は「行った」であり、中国語の補語の「到、去」とは重みが違う。これは一歩あやまると、「持って来た」(1例)「伝えていった」(2例)「伝えてきた」(1例)のような訳を生み出すことになる。「带去」を「持って行った」と訳した人の中にもこの事を意識していない人が相当にいそうに思う。「持つ」という動詞は「身に帯びること」を表すので、「持って行った」としうるが、「伝える」では、それ自身に移動の意が含まれるので、「行った」は付加する必要がないし、また、不可なのである。中国語の「動詞+補語(到、去)」などは日本語の「て行く」「てくる」に一応対応するとしても、動詞によってはその形をとらないものもあることに注意したい。趨行補語等の訳しすぎは普遍的に見られる誤りである。

⑨で他に触れておかねばならないのは、「結合」は「鑑真はAとBを結合した」のだから、他動詞「結びつけた」を用いなければならないということである。簡単なことのように思うが、「結びつけて」と訳した例は一例のみで、

○「結んで」(2例)「結べ」(1例)

「結び」(1例)「交ぜて」(1例)

○「結びつき」(5例)「結びついて」(3例)

○「結び合い」(1例)「結び合って」(1例)

○「結ばれて」(1例)

○「結び合わせて」(1例)(これは他動詞ではあるが、「合わせる」は程度の対等なもの、ここでは日本文化が主であってそれに添えられたものだから「つける」を用いる)

のように様々な誤りが見えているのは、「結びつける」という語にクラス全体が出会ったことがなかったというより、原文の「(A)同B相結合」にひかれたためだと思う。

おわりに

僅々九一字の文からなる小論の翻訳と、その添削例であるから、中文日訳の問題点の普遍的なものを全てとり上げられるはずもないが、「中国語と対応する漢語」の厄介さ、「的」と「の」の対応とズレ、などいくつかの基本的かつ典型的な問題はこの小さな分析からもうかがえよう。

また、文中に三度ふれた「切れそうなつながり」「隙間」「溝」という言葉で取り上げた事柄は、日中両国語の根本的性格の違いに由来するということである。一方は膠着語、一方は孤立語とは、文法の授業では何度も耳にしていることであろうが、語と語をつなぐのに「テニヲハ」を用いるのと「位置関係」によるのとの違いは、そのレベルにだけ現れるのではない。分析例にも見たように、フレーズ相互のつながりにも、句点でわけられる文相互の関係にもひびいているのである。いわば一文間の文法レベルの問題が、文相互の翻訳技術にも働くということは、より留意されるべきだと思う。

注1 「毛泽东选集」第五卷、「农业合作化的一场辩论和当前的阶级斗争」に“如果有问题，就要从个别中找出普遍性。不要把所有的麻雀统捉来解剖，然后才证明“麻雀虽小，胆肝俱全。”とある。

注2 岩波のそれは「他的～很大」を訳す際に出て来た直訳調の日本語であり、光生館のそれは中国における日本語出版物をもその資料としたことによるものと思われる。

注3 「的」と「の」の対応とズレについては、程路頴「日語連体修饰結構浅談」(「日語教学」第11期'80・9)に詳しい

注4 ここでの残像効果という考えは、外山滋比古著「修辭的残像」(みすず書房'68・10)に示唆されて使っている。